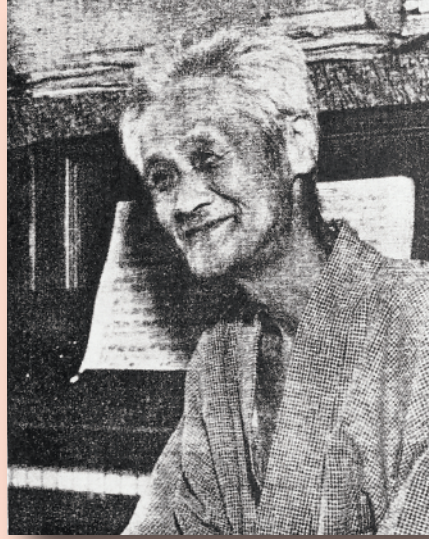




# 兼常清佐

萩市 (1885～1957)



提供・『未完の独奏』復刻本より 大空社

## 【著作】

『日本の言葉と唄の構造』(昭和13 岩波書店)  
『兼常清佐遺作集』上下2巻(昭和35 兼常清佐遺作集刊行会)  
『兼常清佐著作集』15巻+別巻1  
(平成22 蒲生美津子ほか編 大空社) ほか

## 【閲覧情報】

萩市立萩図書館 ☎083812516335

## 【参考文献】

『音楽格闘家 兼常清佐の生涯』(蒲生美津子 大空社)  
『兼常清佐 萩が生んだ音楽界の奇才』  
(三好健二 萩ものがたり)

音楽学者で文学博士の兼常清佐は明治十八年(1885)山口県阿武郡萩町土原(現・萩市土原)で萩藩に仕えた士族の家系に生まれた。

明倫尋常小学、旧制萩中学を経て旧制山口高(理科)、京都帝大哲学科および同大学院に進んだ。東京音楽学校の貫名美名彦(ぬきなみ)に師事しピアノを学んだ後、ドイツに留学し作曲と音響心理学を学んだ。大正十四年(1925)「日本ノ音楽二就テノ一觀察」で京都帝大より博士号を授与された。

倉敷の大原孫三郎の援助を受けてドイツへ留学した。直前の三年間、東京本郷菊坂にある高等下宿屋・菊富士ホテルの住人であった。ここには錚々たる未来の文豪や思想家が、時期は異なるが共通の空間で、その秘めた才能の発酵・熟成を待っていた。谷崎潤一郎、宇野浩二、広津和郎、竹久夢二や大杉栄、三木清などである。瀬戸内晴美(寂聴)が『鬼の栖』で女主人の聞き書きとして兼常の逸話に触れている。

大正から戦前・戦中にかけての五十冊に及ぶ著作や数百におよぶ随筆・論文は音楽、文学、歴史、哲学や数学、物理、生物、心理学とアートからサイエンスまで多領域にわたり学際的である。その先進的な考えや彼独特のシニカルな発言は、真意が伝わり難く当時の楽壇や文壇から正当な評価を得られなかった。

戦後発表された仏文学者・桑原武夫の『第二芸術』論は、俳壇・歌壇に衝撃を与えた。兼常は、戦前に同様の批判を既に試みていた。『アララギ』の総帥で医者齋藤茂吉は腹に据えかね、同誌連載の「童馬山房夜話」で「兼常氏の歌壇評」「続兼常」と二度にわたって触れ、鬱憤を晴らしているのは興味深い。兼常の著作に明星派の『石川啄木』と『与謝野晶子』の評伝がある。

業績の一つは、音響物理学による「ピアノの構造」についての研究である。成果を昭和十年(1935)『中央公論』に「音楽界の迷信」と題して発表した。これが新聞紙上に「ピアノスト無用論」のタイトルで取り上げられ、独り歩きした。「兼常清佐」の名前を、良い意味でも別の意味でも一躍有名にした。

兼常のライフワークは亡びゆく民謡を蒐集・保存して、科学的な装置を使って分析する研究で、成果の一端は『日本の言葉と唄の構造』に著された。柳田国男は民俗学の立場から、柴田南雄は民俗音楽の立場から兼常の研究を高く評価した。昭和三十二年(1957)東大病院にて、在野で孤高の研究者は、途半ばにして七十一才の生涯を終えた。

(文・三好健二)

ピアノの先生はほとんど例外なしに言う。『お前はタツチを勉強しなくてはいけない。ピアノの鍵盤の打ち方こそピアノの技術の真生命のあるところである。鍵盤の打ち方ひとつで音はいろいろに変わる。打ち方の上手な人の指からは美しいピアノの音が出る。お前は手の形、指の形などを十分によく注意して、よく先生の言うとおりに直して、いいタツチの出来るように勉強しなくてはならない。先生に習わないで自分一人でやったのでは、指や手の形がわるくて、ピアノの音が美しくない。』

これが迷信である。常識で考えて見ても、そんな出鱈目な事があり得ようはずがない。パデレウスキーが叩いても、猫が上を歩いていても、同じ鍵盤からは同じ音しか出ない。どの指で、どんな打ち方で叩こうと、そんな事は音楽の音とは別に何の関係もない。それはただ先生が御愛嬌にそんな事も言ってみるだけのものである。それを本当と思いきんで、真面目になって、その通りをピアノの上でやって見ようとするのは、本気で考えると頗る馬鹿げた話である。それが迷信である。音楽はただ音楽である。楽器は楽器より以上の何物にもなり得ない。ピアノにはピアノで出来る以上の事は決して出来ない。私はこのお話で多少でも本当の事と迷信との間に境界線が引けたとしたならば、些くも私が朝夕弾いているこの一台のピアノだけは、非常にそれを喜んでくれるであろう。

(『中央公論』昭和10年1月号「音楽界の迷信」より抜粋)



直筆原稿 (萩博物館所蔵)